



## 鷺の宮卓話

### 正義に加担しない

太田敬雄

「どちらかの正義に加担しなければ生きていけないのなら、詩は沈黙するしかない。」上毛詩壇の選者、富沢智氏の今年の11月19日の【評】の中の一文である。

この文の前には「いま、詩という立場で戦争を扱うことは難しい。先の大戦の「戦後詩」として、真摯にその課題に向き合った経験を持っているからだ。」と記され「どちらかの正義に・・・」と続く。

私は高校時代から詩に興味を持ち、いくつかの作品を愛読していたが、詩作に大きな影響を与えてくれた二つの言葉があった。

一つは高校生だった頃、新宿駅でガリ版刷りの小さな詩集を一冊多分10円くらいで立ち売りしていた詩人から買った詩集に「詩は志でなければならない」と書いてあった。当時の私には大事な言葉だった。

大学に留学し、本気で詩を書き始めたきっかけは恩師 Dr. Eastman との出会いだった。イーストマン先生の創作サークルに入り、さらに先生の創作の授業も受講した。週3回の授業で2回は作品を提出することが義務付けられた。その作品は全受講生に配られ、全員で評するのが毎回の授業だった。

自分が提出した作品は可愛いのだが、先生は作者が口を開くことを一切禁じ「一度提出した作品は、手放しなさい。親が子供の手を引いて歩くように、作品を弁護してはいけない。」と教え

られた。先生はまた、若い学生の作品の出来よりも書き続ける努力を大事にされた。

帰国後、イーストマン先生の作品に向き合う姿勢を心の支えとして、時折作品を書いていた。余り発表の場を求めたことは無かったのだが、上毛新聞の詩壇には2020年頃、幾つか投稿した。最近の私は上毛詩壇への投稿はしていないが、掲載されている詩を読む時は富沢氏の評を楽しみに拝読している。

そうして出会ったのが、冒頭の一文だった。

「志でなければならない」や「作品の手を引いて歩いてはならない」を生きる上での教えとしたように、「どちらの正義にも加担しない」も単に詩の話としてでは無く、生きる上での大事な指針として受け止めたい。

国際比較文化研究所において、平和を作り出す理念を掲げるのではなく、主義も主張も異なる人々が交流を通して友となる事を目指して活動してきた。それは気の遠くなるような先の長い平和活動だが、そのみが「平和を創り出す」道だと信じて20年以上細々と続けている。その思いをなかなか明快に表現できずに来たが、富沢氏の一文によってその思いが明確に言葉にされた感動を味わっている。地球の平和を願って、IIMSでは「どちらの正義にも加担しない」活動を続けて行きたい。

「どちらかの正義に加担しなければ生きていけない」時代がもしも来たなら、国際比較文化研究所もまた「沈黙するしかない」だろう。

富沢氏は詩集の居場所を創りたいと1998年に「榛名まほろば」を喫茶室とイベントスペースを設けた現代詩資料館を創設されたという。一度富沢氏に会いに行きたいと思う。資料館主とNPO所長の異業種交流を考えるとワクワクする。

## IIMS マラン事務局の歩み

海外理事 菅ヶ谷マコ



インドネシアのマランで初めて多文化交流が実施されたのは2007年のことです。その2年前にマランを訪問した太田敬雄先生が「ここで多文化交流を」と構想されたのが始まりです。2007年の第1回多文化交流 in マランは、日本人留学生や日本語教師、ブラウウィジャヤ大学の日本語学科第一期生が中心となって見事にスタートを切ってくれました。この第1回がなければ、今の多文化交流 in Malang は無かったと思います。のち、年に1回のペースで継続してきました。学生たちが実行委員を数回務め、次の後輩に繋いでいく方式です。毎年すばらしいメンバーで多文化交流の実施ができるのですが、私以外は入れ替わっていくので、終わるたびに「来年のスタッフどうしよう」が始まるのでした。「マラン事務局」という呼称はあるものの実際には私がひとりだけでした。できれば優秀なスタッフには卒業後も事務局を手伝い、引き継いでほしいと思っていましたが、そんな人はたいてい、留学や就職で日本へ行ってしまいます。

ともかく、「事務局ひとり」を解消せねばと、2023年に「IIMS マラン事務局」を発足しました。2020年以降ストップしていた「対面の多文化交流」再開の目途がたっていなかったので、「ここでできる日本語での交流をしよう」と、交流会を発案しました。初回は、今年6月に「日本語でおにぎり作りを学ぶ会」を開催し、日本語科の学生や在住日本人のみなさんが参加して大盛況でした。また、各自おにぎりを再現できるように「ここで調達できる材料を使おう」と、インドネシアの米や最近普及している韓国風海苔（インドネシア産）を使ったり、地元のおかずを具材にしたりしました。こういったアイディアは、準備ミーティングで出てきたものです。「三人（以上）よれば文殊の知恵」とはこのことか、と感じました。オンラインミーティングが終われば10分後には議事録がまとめられ、買い出しも手分けしてサクサクと進みました。

そして第2回目の交流会「お団子を作る会」を11月5日に実施しました。トータル35名の参加者は、留学生などの在住日本人や日本語科の学生、幼少期に日本に住んでいた人、高校生、独学で日本語勉強中の社会人など、前回より多様化してきました。5グループに分かれて、みたらし団子と三色団子を作りました。「日本人と話して勉強になった」「学生さんの日本語が上手で驚いた」「楽しかった。また次もぜひ参加したい」という声を聞きました。「次回のメニューはなんですか」という質問も。お料理教室ではないのですが（笑）。



現在、IIMS マランスタッフは社会人2名、現役学生2名と私です。それぞれ仕事や学業に多忙ですが、夜9時からオンラインミーティングするなどタフに活動しています。しかし！やはり、うち2名が最近、半年の教員研修と1年の留学で、日本へ行ってしまったのです。困ったことに…でも喜ばしいことですね。2024年2月の多文化交流インドネシア・マラン実施を控えて、スタッフを補充して活動を続けたいと思います。皆さんも応援よろしくお願いします。



マコさんが居られたからこそ、続けられた「多文化交流 in マラン」。いつも安心して預けていました。これからのマラン事務局の発展とマランの皆さんのパワーはIIMSの明日にとって大きな希望で支えです。

## 多文化交流 in インドネシア・マラン 2024

群馬県立女子大学 4年 唐沢実里



2024年2月に5年ぶりとなる「多文化交流 in インドネシア・マラン」が開催されることになりました。私は今回、日本側の引率を務めております。私自身、インドネシアを訪れたことがないので、想像が付きにくい部分もありますが、どのような経験ができるのか、非常にワクワクしているところです。

個人的な話をさせていただきますと…私は現在大学4年生ですが、大学生活の半分以上を「多文化交流」に捧げてきました。コロナ禍でのスタートだったため、多文化交流オンラインから始まり、多文化交流 in ぐんま、さらに韓国プサンにも参加をすることができました。多文化マランのことももちろん知っていましたが、正直、学生のうちに経験することはできないと思っていたので、開催の話聞いたときは非常に嬉しかったのを覚えています。

現在、マランの現地スタッフとともに準備を進めている段階です。今までの多文化マランとは少し違う形にしたい、と現地の方も仰っており、どのようになるのか楽しみです。現段階では、マランの街を散策したり、大学キャンパス見学をしたり、ビーチを訪れたりする予定です。もちろん、現地の学生さんとの交流もあります。

「多文化交流」は友達になる「きっかけ」を提供することを目的としています。私自身、何度も多文化交流に参加をし、国内外問わずたくさんの友達に出会うことができました。多文化交流を通じて、一人でも多くの方にこの素晴らしい経験をして欲しいと思っています。

「多文化交流 in インドネシア・マラン」に参加して、共に友情の輪を広げてみませんか。

## 多文化交流 in ぐんま 2024 冬

群馬県立女子大 2年 高間咲輝



みなさんこんにちは。多文化交流 in ぐんま 2024 冬でスタッフ代表を務めております、高間咲輝と申します。今回は、スタッフを代表して多文化交流 in ぐんまについてや、私たちの思い、当日の楽しみ方について紹介したいと思います。

このイベントはたったの3日～4日寝食を共にするだけでも関わらず、ここには書ききれないような魅力があります。私自身もこれまで3回スタッフとして参加してきましたが、毎回違う発見と感動があります。コロナ明け後4回目の開催となる今回はホームステイ企画への挑戦も考えています。私たちにとって、ホームステイ企画は誰にも想像できない、いわゆる未知への挑戦であります。正直、それに対する不安はありますが、それ以上にまた新しい感動が生まれるという確信とともに楽しみな気持ちでいっぱいです。毎回新しい仲間たちとともに、新しい挑戦をすることもまた、このイベントの魅力を高めていると感じます。

ここで、当日の過ごし方について紹介します。それは、「全力で楽しむ」です。楽しみ方は人それぞれでいいと思います。ただ、私たちはこのイベントを普段皆さんが気にしながら過ごしているかもしれない年齢や性別、国籍のしがらみから少しでも離れて楽しんでほしい、という想いで作っています。もちろん、スタッフも一参加者として全力で楽しむ所存です。

最後になりますが、私がこの多文化交流イベントに出会えたことに感謝するとともに、少しでも多くの皆様に知っていただけることを願っています。

## オムニバス講座 「ひげじいの Going my way」 報告

10月3日から隔週4回開催した秋のオムニバス講座。スタッフからの要望で「太田先生の授業の時間」というコンセプトでの実施となりました。第1回のテーマは「虎の目、クジラの目」、第2回は「アーミッシュ」3回目は「人と人の距離と文化」、そして最終回は「ひげじいの苦手克服術」。私に関心を持っているテーマを並べたもので、繋がり「ひげじいが喋る」ことだけのまさにオムニバスな講座でした。

オンラインの講座であり、録画され編集のされています。一般公開はしていませんが、もしも視聴を希望される方が有れば、太田まで視聴希望回をご連絡下さい。ユーチューブの URL をお送りします。

太田敬雄

## 「友達の輪が目指す平和な地球社会創り」

今の時代は、この活動を増々求めるようになっていきます。皆様に支えられ、使命感を持って、これからも「多文化交流活動」「オムニバス講座」を始め、諸々の活動を力強く進めて参ります。

## 会費及びご寄付のお振込みについて：

### 【クレジットカードによる手続き】

下記 QR コード、もしくは IIMS のホームページからアクセスして頂き手続き・ご登録ください。



研究所 (IIMS) のホームページ  
<http://www8.wind.ne.jp/mthc>

### 【振込用紙による手続き】

郵便振替口座：加入者名 国際比較文化研究所  
口座番号 00510-1-61974

ニューズレターを郵送させていただいた皆様には、振込用紙を同封させていただきます。これは請求書ではなく、一律に皆様にお送りしているもので、すでに会費をお振込み下さった方にもお送りしています。

メールでニューズレターをお送りしている方々には振込用紙をお届けできません。特に会費の請求はお送りしておりませんが、郵便局の振込用紙、もしくはカードでお振込みくださいますようお願いいたします。

ご入会状況及び会費・寄付振込状況 (23.9.11.~23.11.20.)

カード振込は (22.9.1.~23.10.31.)

会費やご寄付のお振込み、有難うございます。皆様に支えられて 2024 年度に向かいます。

会費のカッコ内は年度。カッコ無しの氏名のみは 2023 年度会費。敬称は略させていただきます。

正会員入会： 恩幣宏美

学生会員入会： 林紗衣理、(以下は9月号に記載されるべき方々でした。記載漏れ、申し訳ありません。)

塩澤七菜、May Mar Khine、蘆榮俊、宇田川シティはな、

正会員会費： 恩幣宏美 賛助会費： 間庭由美子、石川力(24)、青葉由香、阿部洋一、永田強一、木村真弓(22,23)、遠間徹也、

一般寄付： 間庭由美子、青葉由香、村井田和夫、木村真弓、手塚恵、永田強一、栗野明子、山村由美、今井睦子、石川力、 毎月寄付： ファン翠、樋本達之、根岸大輔、Rosdiana Febrianti、藤本恵大、内野春香、片岡謙。

多文化交流寄付： 大宮登、野口紀子、梶山拓弥、カティリ・カズコ、狩野真由美、

編集後記： ◎今年柿の当たり年！我が家の柿は巨木になってしまったので、三脚に上って柿を収穫。とても食べきれないので、知り合いに配らせて貰ったり、ジャムを作ったりドライフルーツの試作を試してみたりした。ナスも最近までかなり出来たので、連日我が家の食卓にはナスの料理と柿が並んでいた。

◎来年春の多文化交流、マランとぐんまの準備が始まりました。楽しみです。(敬)

発行：特定非営利活動法人国際比較文化研究所

事務所：379-0124 群馬県安中市鷲宮 3413-3

電話：027-382-5998 FAX:027-382-6393

研究所：<http://www8.wind.ne.jp/mthc>

メールアドレス：[iims.since2000@gmail.com](mailto:iims.since2000@gmail.com)

まなばる：<https://www.manapal.jp>

メールアドレス：[mail@manapal.jp](mailto:mail@manapal.jp)

郵便振替口座：加入者名 国際比較文化研究所

口座番号 00510-1-61974